

(二〇一四年度)

6 国 語 問 題 (六〇分)

(この問題冊子は23ページ、三問である。)

受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、監督から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 五、解答は解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいいいに消すこと。消しきずはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

1 身体以外に真実などというものはない。というのが大袈裟^{おかげせ}だとしたら、少なくとも、どんな真実もそれが身体において言わば受肉され、経験され、生きられなければ、真実だということにはならない。ひとの心のもつとも奥深いところ、ひとの生のもつとも根底、そういったものにかかわらないようなものは、それがどれほど正しい命題であろうとも、真実という名には値しない。事実を事実として述べたからと言って真実ではないのであって、事実を超えてしまい、しかもその超出が身体において、(それ以外ではありえない)という感動的な確実さとともに生きられてはじめて、われわれはいくぶんか真実とはどのようなことなのか識^しつたことになるのだ。

だが、そうなると、はじめに述べたように、結局、どんな真実も、ただ身体²というこのいかにも明らかで、しかしわけのわからない不思議な存在のヴァリエーションではないか、という疑いも兆してくる。死、性、労働、霊……そういったすべての真実は、結局は、身体というわれわれの唯一の真実のたかだか「系」にすぎないのであって、だが、まさにそんな個別的な「系」としてしかそれが見えてこないことこそが、身体という大真実の所以なのだ³と考えるべきなのかもしれない。

身体は大真実だ。だが、この真実が厄介なのは、われわれの誰もが——生きてこの世界にある限り——その身体として存在していることだ。そして、それ故に、ほかのものならばともかく、われわれは自分³がそれであるところのこの真実だけは、なかなか真実として受け止められないことになる。われわれはすでにそれである。われわれ自身がすでにそれであるところのものが、なんで真実などと言われよう。われわれはすでにそれなのだから、それが何なのか、これ以上ないくらいよく分かっているはずだ。だが、そうか?

むしろわれわれがすでにそれであるからこそ、われわれはけっしてそれが見えない、分からないと言うべきではないか。われわれの能力の問題ではない。知力の問題ではない。そうではなくて、構造的に、われわれはわれわれの身体がどんな真実なのか分からないという根源的盲目によって貫かれて³いる。われわれがそれであるという存在³状態が、その存在の真実を隠蔽^{いんぺい}し

てしまっているのだ。

あるいは、別の言い方をすれば、われわれは、われわれが身体であり、それでしかないということ⁴を容易に認めはしない。急に歯が痛くなったり、老いて白髪が増えたり、腰が曲がったりしても、だからといって「わたし」というものが取り返しのつかない仕方で変化したとはふつうひとは考えない。わたしはたしかに身体を持ち、身体によって規定されているが、しかしだからといって「わたし」は身体そのものとは違うと了解しているのである。「わたし」は自由である。身体の拘束を超えて、もつともつと自由である。わたしが身体であるのではなく、わたしはわたしの身体を持っている。存在ではなく、所有。というふうに転倒が起こるのだ。⁵「De」動詞が「Have」動詞に移行する。そして、そこから、——大袈裟に言えば——人間の文化の根底をなす一切の所有・私有の問題が到来するのだ。

われわれは身体である(存在)にもかかわらず、しかしその真実に眼をつぶり、それを転倒させて、われわれが身体を所有していると思ひ込む。身体を所有し続けなければならないと思ひ込むのだ。そして、われわれはみずからの身体の延長にさまざまのモノを所有しようとし、さらには他者の身体までもあたかも自分のモノであるかのように所有しようとする。⁶そこに幻想が生じ、文化が生まれる。存在の転倒から文化という幻想が生まれてくるのだ。この点については、フロイトが発見した無意識の論理の機構が「去勢」という幻想の出来事にかかっていたのが興味深い。あそこでも、男であるか女であるかという存在の論理は、全体と部分とのあいだの非対称的な転倒を経て、ある小さな器官を持つか持たないかという所有の論理に転換させられてしまっていた。存在が所有へと転倒されて、そこに幻想が生まれるのであり、われわれは言わばみずからの存在の真実を見ないようにするため、あるいは見えないからこそ、それを幻想にかえてとりあえず了解しようとするのである。

われわれが身体を持っていると思ひこんでいるとき、われわれは身体を一種のモノのようなものとして考えている。この世界を満たしているさまざまな物体や物質と同じようなステータスを持ったモノ。「わたし」の自由の力に属するが故に譲渡不可能ということになってはいるが、しかし本質的には取り引き可能、交換可能、接触可能な実体のようなモノ。身体は物体のなかのたかだか特殊なひとつにすぎないというわけである。ここには、存在するものはモノだ、という強い思ひ込みがある。だ

が、はたしてわたしの身体は、そのテーブルの上の珈琲茶碗コーヒーチャワンと同じ資格でモノなのか。珈琲茶碗の存在はそれほど明確で、それだけが存在のモデルを呈示できるのか。そこにもまたもうひとつの転倒があるのではないか。というのも、われわれはひよっとしたら珈琲茶碗や灰皿がどのように存在しているのか知らないのかもしれないからだ。われわれが本来識っているべきなのは、われわれがどのように存在しているかだ。われわれが身体であり、身体として存在しており、それがどういふことなのか、ほんとうはわれわれは識っていないはずだ。ところが、われわれはいつの間にか、存在しているということを、われわれではない他の物体の存在から出発して了解してしまう。⁸ あたかも、われわれの身体が珈琲茶碗や灰皿と同じ存在様態をしていくかのように錯覚してしまうのだ。

だが、そうではない。ひよっとしたら、われわれは野草や虫鳥は言うに及ばず、星辰せいしんにしても人工物にしても、珈琲茶碗から灰皿に至るまで、むしろわれわれの身体という存在様態から出発して理解するべきなのかもしれないのだ。誰のだから知らない——実はそれが大きな問題ではあるが——、しかしこの珈琲茶碗、この灰皿は、物体というよりはむしろひとつの身体としてそこにある！⁹ そういう認識を通じていかなければ、われわれはわれわれの身体がどのように存在しているのかをけつして理解することはできないのではないだろうか。

この世界と相関しているわれわれの存在のあり方とは、物体のそれではない。むしろ身体のそれである。身体の実相がどういふものであるのか分かりさえすれば、われわれはこの世界の秘密を知ることができる。¹⁰ 世界には秘密がないというその最大の秘密をおそらくは正当に知ることができるのだ。

だが、それにしてもどのようにしたら、われわれにこんなにも近い身体の実相を知ることができるのか。身体を身体に戻し、身体をその存在に戻す。そのためには、われわれはただ純粹な注意をわれわれの身体に傾けることしかできないだろうか。呼吸をする、歩行する、食事する、眠る……身体のミニマル・ベーシックに静かで全体的な注意を注ぐ。溢れるほどの限りない注意を注ぐ。魂の折りであるような注意を注ぐ。そんなふうにして、しばしば乖離かいりしがちなわれわれの心と身体とをゆつたりと一致させるようにする。遠い、しかし激しい雷鳴のように、そもそも心と身体とは別のものではなかったことを思

い起こさせる。心というこんな激しい酸から身体がゆったりと癒されていかなければならない。自分の存在を肯定しなければならぬのだ。

（小林康夫「こころのアポリアー幸福と死のあいだで」）

（注）フロイト：オーストリアの精神科医、精神分析学者。

ミニマル・ペーシック：ここでは最低限の必要性のこと。

問一 傍線部1はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 事実を事実として語ったからそのまま真実だというわけではないのだが、心からの感動が伴えば真実になりうるということ。
- b 死にしても性にしても霊にしても、とどのつまりは身体という人間にとってただ一つの真実の派生物とは見なしえないということ。
- c 本来、人間の存在様態とは身体でしかありえないのだが、われわれはその事実を容易には受け入れようとはしないとすること。
- d 真実とは何かを知るためには、事実が事実を超え、さらに超え出たものが身体において唯一の確実さとともに生きられなければならないということ。

問二 傍線部2のように著者が述べるのはなぜか。次の中からもっとも適切な理由を一つ選べ。

a われわれ人間は身体として存在していることが明らかであるにもかかわらず、それが自分たちの所有物であるかのよう
に錯覚してしまうから。

b 身体において、真実が経験され、生きられ、受肉化されないかぎり、その真実を本当の意味での真実と呼べないか
ら。

c 身体というものがそれがわれわれにとっての唯一の真実なのであり、われわれはその身体としてしか存在しえず、しか
もその真実を受け入れがたいから。

d 死、性、労働、霊など、これらは明らかに身体的な現象ではあるのだが、同時にそれらについて論じ始めると議論が
尽きないから。

問三 傍線部3のように著者が問いかける理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 身体というものがわけのわからない不思議な存在だから。

b 身体というものが大きな真実だと信じるに足る理由があるから。

c われわれは身体の拘束を逃れているという幻想が生まれているから。

d われわれが身体であるがゆえに、その存在がかえって隠されてしまうから。

問四 傍線部4のように著者が述べるのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a われわれは自分自身が身体によって規定されていることは認めつつも、やはりどこかで身体による拘束を逃れ自由だ
と思ひ込みたいから。

b われわれは自分自身が身体であることは認められるのだが、それだけでなく精神面も重視してしまうから。

c 歯が痛くなり、あるいは加齢によって白髪が増えたとしても、その理由だけで自分自身が別人になったと考えること
は理論的にありえないから。

d 身体が大真実であることは容易に受け入れることができるのだが、同時に自分自身が身体であることが隠蔽されてい
るから。

問五 傍線部5は何を意味するのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 身体は存在するものではなく、所有すべきものという誤解が生じること。

b 存在が所有へと転倒してしまい、存在の真実が隠蔽されてしまうこと。

c モノだけでなく、他者の身体までも所有してしまおうと望むこと。

d 〈Be〉動詞が〈have〉動詞に転換してしまい、混乱が生じること。

問六 傍線部6はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 男女の違いという存在の論理が、ある生殖器官の有無という所有の論理にすり替わるのは幻想だが、それを現実と見なす文化もあるということ。

b 自分自身が身体という存在であるにもかかわらず、身体を所有している、そして所有し続けなければならないと思ひ込んでしまうこと。

c 存在の論理を所有の論理と置換するときわれわれが身体であるという真実が隠れ、幻想が生じるが、その幻想により真実から目を逸らすことが文化的行為だということ。

d 身体は本質的に取り引き可能、交換可能、接触可能な実体的なモノであると強く思い込んでしまうこと。

問七 傍線部7はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 珈琲茶碗などのモノが存在のモデルになりうると思ひ込むこと。

b 身体が物体の中の特殊なひとつにすぎないと信じ込むこと。

c われわれが身体を所有してしまふと思ひ込んでしまうこと。

d 珈琲茶碗の存在をそのまま所有の概念に置き換えてしまうこと。

問八 傍線部8はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 珈琲茶碗や灰皿は取り引き可能、交換可能な実体としてのモノなのであるが、われわれの身体も同じような存在のしかたを持つと勘違いすること。

b 珈琲茶碗や灰皿は取り引き可能であり交換可能でもあり、それゆえ値段をつけることができるが、身体もそれと同様だと勘違いすること。

c 珈琲茶碗や灰皿はわれわれの生活にとても近く存在するが、その近さゆえに身体と似たような存在様態を取っていると思ひ込んでしまうこと。

d われわれは身体が存在のしかたもよく理解していないのだが、同様に珈琲茶碗や灰皿の存在様態もよくわかっていないと考えてしまうこと。

問九 傍線部9はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 珈琲茶碗や灰皿は単なるモノでしかないのだが、ひとつの身体として見なせば、隠された身体を暴露することができるという認識。

b 珈琲茶碗や灰皿が単なるモノとしてこの世界に存在すると見なすのではなく、それらをわれわれの身体がとらえたものとして考えなければならぬという認識。

c 珈琲茶碗や灰皿が単なるモノとしてこの世界に存在すると見なすのではなく、身体のように背後に文化や歴史を隠し持っているという認識。

d 珈琲茶碗や灰皿がどのように存在しているのかもわれわれは知らないのかもしれないかもしれませんが、とりあえず身体と比較してみることが大切だという認識。

問十 傍線部10はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 珈琲茶碗も灰皿も物体というよりは身体として存在するという認識を通れば、われわれの身体の存在のしかたもすべて理解できるということ。

b われわれにあまりにも近い身体の真実を知ることができれば、世界の秘密を知ることになり、もはや秘密は残されていないとわかること。

c 自分の身体に関する真実を理解することができれば、もはや世界に秘密はないも同然であり、残されるのは身体と物体の違いを知ることだけになること。

d 世界中の野草、虫鳥さらに星辰さえも理解しつくされてしまった現在、世界のどこかになお秘密の場所を見つけることはできないということを知ること。

問十一 本文の内容に一致しないものを次の中から一つ選べ。

a われわれは身体そのものであり、それゆえに身体を理解できない。

b われわれは身体を存在としてではなく、所有物のように勘違いしがちである。

c モノを理解するとき大切なのは、それが身体として存在すると認識することである。

d われわれが事実を事実として述べたとき、真実は生まれる。

二

次の文章は、福沢諭吉が明治十六年に書いた「外交論」の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。

樂を得んとすれば苦も亦大なるかな。三十年來、我文明の進歩は誠に駭々乎として、内外の耳目を驚かしたりと雖ども、前にも云へる如く、開国の日尚浅くして、人民の心身未だ文明の運動作用に慣れず、其状恰も水を見て驚かざれども尚游泳の法に拙なく、馬に逢ふて恐れざれども未だ騎法に巧ならざるが如し。況や國中不学の輩も甚だ少なからずして、此輩に至りては固より文明の真味を嘗るに由なく、唯其空氣に吹かれて浮沈するまでの者なれば、時としては浮かれて前に進まんとして忽ち路に妨げられ、時としては沈みて後に退かんとして又忽ち故障に遭ひ、其間には多少の苦痛を覚ゆることならんと雖ども、是れは人事運動の常なれば、忍びて之に堪ふるの外に方便あるべからず。唯我日本国は、開国文明と主義を一定したる上は、益々この主義を拡張して、政事法律も此主義に従ひ、教育文化も此主義に従ひ、工業商売より人間日常の細事に至るまでも、事實に妨げなき部分は西洋風に組織して、新日本国を大成すべきのみ。

斯の如くして路に故障に遭ふこともあらば、千思万慮、或は其主義とする所のものが、尚疎漏にして文明の真意に叶はざるが故に故障の多きには非ずやと、前後を視察して益々佳境に入らんことを求め、万々止むを得ざる場合に於いてのみ、暫く時を仮して開進の歩を緩にすることもあるべしと雖ども、既に一定したる大主義に向ては、何等の苦痛あるも一步を退くべからず。蓋し我日本国が、平時に於いて榮辱を感じ、事あるの日に於いて成敗を決するも、唯文明の進退如何のみに関すればなり。即ち、我社会の大勢が全く西洋諸強国の如くなりしや、或は尚未だ其境界に達せざるやを見て、自から軽重をトすべく、他も亦我れを軽重すべければなり。

或は聞く、近來我国人の中に於いて、自から老成などと称する一部分の輩は、今の文明開進の状を見て進むに過るものと名づけ、時として挽回の工風を運らす者もある由なれども、畢竟文明の何ものたるを知らざる不学者流の考にして、唯一時の狼狽なれば、又時として頓に安心の場合に至るべきのみ。我輩これを開進の大勢上より視れば、深く憂ふるに足らずと雖ども、仮令ひ一時の事にても、一時は一時だけの妨害たるべきが故に、聊か此輩の為に惑を解て速に安心せしむるの法を勉めざ

るべからず。

抑も此流の人は、最初より西洋の文明を悦ばざるに非ず、曾て之を悦て心事を改めたりと雖ども、其改心の路たるや、西洋の学問に由らずして技術より入たるものなれば、身に文明の事を行ふも、之を信ずるの心は則ち篤からず。例へば蒸気船車の便利を見て之に乗る者は、唯其運転の自在にして迅速なるが故に之に乗るのみ。即ち文明の技術を悦て文明の事を行ふ者なれども、苟も西洋の学問に志す人は、船車の運転を見ても、本来其蒸気機関の働く所以の真理原則に遡り、斯る機関を工夫するも偶然に非ず、学問の何れの道より進て何れの点に達したるものなり、即ち今日撃する所の此蒸気船車も、西洋文明の枝に咲きたる花なりとして、中心大に感ずる所のあるべし。即ち学問上に文明を信ずるものにして、其信心の篤き、単に技術を悦ぶ者に比すれば同日の論に非ざるなり。

蒸気船車は有形にして、之を日本旧来の船車に比すれば利害固より明白なるが故に、学問の人も技術の人も、其信心の厚薄を見るに難しと雖ども、少しく進て医道に至るときは、其信不信を以て人の学不学を明知するに足るべし。人生、病を恐れて生を欲せざる者なし。其恐るべき病に罹て治を求るに当り、和漢古流の医道と西洋文明の新医道と何れか択ぶべきや。苟も真理原則の信すべきを信じて疑はざる者ならば、医師の巧拙に論なく、医道の根本に於いて古流の取るに足らざるを知り、新古両ながら医と称すと雖ども、真理原則の学問上より論ずれば、古流医道は全く実理外のものたるを知り、病の軽重に拘はらず、断じて古流を拒絶して、仮令ひ死するも西洋医流の手に死して安心することならん、古流の医薬を服するよりも寧ろ單純なる清水を飲むことならん。

蓋し医道の取捨は、宗教の信偽を争ふが如く漠然たるものに非ず、取るべきの実証あり、捨つべきの実証あり、真理原則欺くべからずと雖ども、今日の実際に於いて、果して西洋の新医道を信じて疑はざる者は、社会の多数に非ざるべし。無智の小民は姑く捨て論ぜず、上流の士君子、社会の表面に立て事を論じ事を行ふ人物にして、其心事の堅固ならざること、実に驚くに堪へたるもの多し。或は世の流行に連れて西洋医を信ずるが如くなるも、一旦の病苦に切迫すれば、忽ち惑迷して平生の節を屈し、万一を古流に僥倖せんと欲する者なきに非ず。其実は洋中風浪に遭ひ、汽船を去りて帆船に移るに異ならず。愍然

なりと雖ども、畢竟其平生に於いて西洋文明の主義を信ずること篤からず、文明に入るに学問の路に由らずして、技術の門よりしたるの罪なり。病を恐れ生を重んずるは、人の至情にして身の一大事なるに、尚且惑迷して方向を誤る者多し。其他の事に於いて誤謬ごじゅうなきを保すべけんや。人間公私の不幸、不学より甚しきはなし。

〔注〕 学問ガクワン…サイエンス。

問一 傍線部「不学の輩」は、どのような状況にあると筆者は考えているか。次の中から二つ選べ。

- a 日本が進むべき道を考えず、時流に翻弄されるばかりである。
- b 西洋文明の本質を学び、理解するすべを持たない。
- c 西洋文明を直接経験できないため、受け入れようとしても結局失敗してしまう。
- d 文明の急速な進歩を世の中の常として堪えている。
- e 開国以来の西洋文明の流入に驚き、それを拒絶しようと考えている。

問二 波線部ア・イの語句の意味としてもっとも適切なものをそれぞれ一つ選べ。

ア a 障害

b 事故

c 誤解

d 不満

イ a それぞれに

b かならず

c かりに

d まったく

問三 筆者が傍線部2のように述べるのはなぜか。次の中からその理由としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a 西洋文明を目標とした改革には支障があるように見えるが、それらは解決可能な問題であると考えられるから。

b 日本が西洋諸国に戦争を挑むのなら、その日が来るまでに西洋の技術や制度を十分に受け入れる必要があるから。

c 日本が対外的な評価を得るには、多少の困難は伴っても、西洋文明を範とした文明の進展が不可欠だから。

d 西洋強国の学問や技術に懐疑的な人間もいるが、そのすべてを否定することは現実に不可能だから。

問四 傍線部3について、以下のA・Bに答えよ。

A 筆者は「学問」をどのようなものとしてとらえているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 日本人には理解しがたい西洋の高度な技術を支える原理となるもの
- b 実用化を目的として物事の真理や原則を体系化するもの
- c 物事の真理や原則を客観的な態度から明らかにするもの
- d 技術とは実はつながりの無い西洋文明の真髄を象徴するもの

B 筆者が傍線部3のように述べるのはなぜか。次の中からその理由としてもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 西洋の技術をそのまま受け取り、そこにさらに工夫を加える努力を行わない現状では、いずれ受け取った技術も十分に活用することができなくなり、行き詰まりをみせることになると考えられるから。
- b 西洋の学問を学びとろうという切実さがなければ、その技術は日本では運用していくことが難しいため、結局西洋文明の受け入れには消極的にならざるをえないから。
- c 西洋の技術からもたらされる表面的な便利さは享受できても、その原理を根本から学ぶ能力のない日本人には、西洋文明に対する真の感謝の念は起さるはずもないから。
- d 西洋の学問を学び、その求める真理や原理を見極めることがなければ、単に西洋の技術を称揚し、無批判に取り入れたところで、なぜそれを取り入れなければならないのか確固とした信念を持つことができないから。

問五 傍線部4は筆者のどのような考えを示したのか。次の中からもつとも適切なものを一つ選べ。

- a 西洋医学ではなく、東洋医学により処方する薬を飲むくらいなら、ただの真水を飲む方がまだ。
- b 西洋の新医学に従うことは、日本人にとって一服の清涼剤のような効果をもたらす。
- c 西洋の医学を信じ、命を落とすくらいなら、むしろ清水を飲んで結果を待つ方が潔い。
- d 西洋よりも東洋の医学の方が、病を複雑なものとしてとらえる傾向にある。

問六 傍線部5はどのようなことを意味するか。次の中からもつとも適切なものを一つ選べ。

- a 急な病気にかかると、普段の考え方どおりに対応することができなくなり、西洋医学を信じながらも、ひよっとすると和漢の医学の方がすぐれているのではないかと考えてしまう者もいる。
- b 重い病にかかったとき、ふだん利用している西洋医学が信じられなくなり、もしかしたら治るのではないかと東洋医学にすがる者もいる。
- c ふだんは西洋の医学を利用していても、一旦重い病気がかかり、治療法を選ぶ際には、和漢の医学に頼ろうと決めている者がいる。
- d 身分や地位が高くても、病におかされ、症状が悪化すると、庶民と同じように東洋医学の診察も受けてみたいと考える者がいる。

問七 次の文章の中から本文の趣旨に合致すると思われるものを二つ選べ。

- a 西洋の文明を取り入れるには様々な困難が伴うので、一時的にそれを取りやめることもやむを得ない処置である。
- b いまだ国民に定着している主義とは言いがたいが、ひとたび開国した以上、西洋文明を迷うことなく取り入れていくべきだ。
- c 蒸気機関の発明は、西洋の学問の本質を象徴するもつとも輝かしい成果の一つである。
- d 西洋の文物の流入に批判的な者が多いように見えるのは、西洋の学問を学ばぬ者が存在する以上、致し方ないことと考えられる。
- e 西洋文明の根幹を成す学問をないがしろにすることほど、日本人にとって不幸なことはない。
- f 人が病を恐れ、生を重んずるように、西洋文明を畏怖し、日本の伝統を守ろうとする者がいま多く存在している。

三

「もの」と「こと」との関係について述べられた次の文章を読んで、後の問に答えよ。

現実の世界はただ形と運動とからなっているというものの見方がいかに抽象的であるかは、私たちが実際に行っている具体的な経験と引き比べれば明らかです。

私たちが実際に経験するもの、たとえばいま一個の鉄球を手にしてしまうと、それを私たちはもちろん丸い形をしたものとしても見ますが、その場合の「形」は、色や手触りなどを除き去った¹単なる形ではありません。銀色に輝く、そしてずしりと重い鉄球です。またそれを落とせば、落下しますが、それは単なる落下運動ではありません。しまったという思い、あるいは足の上に落ちて大きな痛みを与えるのではないかという恐怖とともにある運動です。この恐怖はただ単に私たちの意識の内側でなされている経験ではありません。それはこのずしりと重い鉄球ともになされているのであり、それと分かちがたく結びついています。事柄の真実の相を捉える上で、私たちは、このずしりと重いという感覚やしまったという思いを、必要なものとして排除する必要はないのです。この鉄球は、銀色に輝きつつ丸い形をしており、しまったという思いを引き起こしつつ落下運動をするのです。

このことを、「こと」には表情があると表現してもよいと思います。たとえば私たちは自分がいま座っている椅子について、ぐらぐらして不安定だとか、逆にどししりと安定しているとか、安っぽいとか、高価に見えるとか、そういった意識をもつて見ていると思います。このような思いが「こと」を作りあげていると言えます。

あるいは普段私が使っている万年筆は、十二、三センチ程度の黒いセルロイド製の物体ですが、それと、使い古したものはあるが他の万年筆にない独特の書きやすさがあるという感覚とは切り離すことができません。またそれは、人生の節々でそれを用いて大切な文字を記してきたという記憶とも結びついています。つまり、この万年筆はさまざまの意味で満たされているのです。あるいは、さまざまな表情をもつていっていると言つてもよいでしょう。私たちの経験のなかでは、この意味や表情が非常に重要な意味をもっています。そしてそうした表情や意味から「こと」は成り立っているのです。

もちろん私たちは、私たちの生活のなかでつねにこの表情を積極的に意識しているわけではありません。万年筆の材質のほうに関心が向けられ、その表情が背景に退いていることもあります。しかし、私たちの経験をいきいきとしたものにしてるのは「こと」であり、その表情や意味であると言えます。

「こと」の世界こそが真実の世界であると言いますと、いろいろな疑問や批判が出されると思います。予想されるいくつかの問題点について考えてみたいと思います。

いま、「こと」には表情があると言いました。その表情はもちろん、人によって違ってきます。同じ万年筆でも書きやすいと感じる人もいれば、書きにくいと感じる人もいます。その万年筆のデザインに注目する人もいれば、それを使って書いたときの思い出に浸る人もいます。同じ川面を見ても、光を背に受けるか、正面から浴びるかで、その見え方は大きく異なります。雨降りの陰鬱さを嫌う人もいますし、その風情を好む人もいます。「こと」は千差万別です。

そこから、私たちが経験しているものは、どこまでもあいまいな、そのときどきに変化するものであり、そのあいまいなものが事柄の実相であるとは言えないという意見も当然出てくるでしょう。「こと」は私たちが意識の内側だけで経験している、つねに移り変わっていくものであり、⁴ 実在の世界を考えるためには排除されるべきものだという考えがそこに生まれてきます。

しかし、私たちが実際に経験している色やにおい、音、あるいはそれに伴うさまざまな思いがただ単に「意識の内面」に属するものであり、事柄そのものとは関わりがないという考えは、やはりおかしいのではないのでしょうか。

私たちの具体的な経験においては、やはり、先ほど言った「表情」が重要な位置を占めています。私の万年筆は、十二、三センチ程度の黒いセルロイド製の物体であると同時に、さまざまな思い出と結びついたものです。両者は別々のものではなく、一体になっています。その一体になったもので、私たちの世界は作りあげられていると言えるのではないのでしょうか。

もう一つ別の例を挙げます。一匹の猛犬が私に襲いかかってくる時、私はただ単に意識の内側だけでその恐ろしさを感じているわけではありません。目の前の犬それ自身が恐ろしいのです。その犬が私の恐怖にじかに関わっているのです。犬そのも

のと、私の意識の内面という二つの世界があるのではありません。両者はどこまでも一つです。それこそ事柄の真相であると言えらると思えます。

もちろん「こと」の第一次性を主張することは、⁶科学的なものの見方を否定するものではありません。それは、私たちが具体的な仕方で見ているものを、それぞれの視点に縛られない三次元空間のなかに置き直して見るということ、さらにはそれを分子や原子の世界として説明することを、無意味なものとして退けようとするものではありません。

ただ、分子や原子からなる「もの」の世界こそが真実の世界であり、色やにおいは私たちが私たちの意識のなかだけで感じているものにすぎない、したがって、真実の世界からは排除されるべきものだという考えに反対するのです。

さまざまな表情をもった「こと」の世界、先ほどの万年筆の例で言えば、それが切なく、懐かしい思いを引き起こすということ、この「こと」の世界を、それぞれの視点に縛られない三次元空間のなかに置き直して「もの」として説明することは、決して否定されるべきものではありません。むしろ、そのことによつて、公共的な言葉で語る場が開かれると言えます。そこに自然科学が成立します。

この二つの見方は共存することができます。しかし、何度も言いましたように、「もの」の世界が真実であり、「こと」の世界が虚妄であるとは決して言えません。美しく咲き誇り、私たちをうきうきとした気分誘う桜の花は、それがそのまま真実の世界なのです。そしてその真実の世界を、同時に、分子や原子の世界としても説明することができます。そういう仕方⁷で、両者は共存していると言えます。

(藤田正勝『哲学のヒント』)

問一 傍線部1はどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 物体の運動はわれわれの意識内での経験をその一部に含んでいる。
- b 物体の運動はわれわれの意識の内側での経験に支えられている。
- c 物体の運動はわれわれの感覚や意識と緊密に結びついている。
- d 物体の運動によってわれわれの内的な意識が引き起こされる。

問二 傍線部2の意味として適切でないものを次の中から一つ選べ。

- a 「こと」は「もの」についての私たちの関心や感覚でできている。
- b 思いや感覚などの「こと」は私たちの記憶と深く関わっている。
- c 「こと」は私たちの生活上で生じる多様な意味を含んでいる。
- d 「もの」の世界は具体的な「こと」についての思いを含んでいる。

問三 傍線部3の中の「意味」の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「もの」がもっている独特の感覚。
- b 私たちの記憶に残る形態や材質。
- c 具体的に生気のある経験のあり方。
- d 意識の内面で注目されている部分。

問四 傍線部4のように考えられる理由として適切でないものを次の中から一つ選べ。

- a 記憶や関心は変化するものであり、法則化することができないから。
- b 個人の内的な意識に関わるものであるために、客観性をもたないから。
- c 主観的な好みの問題であるため、形や運動の世界とは考えられないから。
- d 実在の世界は、形態や運動からなる「もの」の世界であるはずだから。

問五 傍線部5「事柄の真相」とは、どういう世界を意味するか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a われわれが実際に経験している一つの真実の世界。
- b 「もの」と「こと」の二つが統合されている世界。
- c 外的な実在と内的な意識経験の二側面からなる世界。
- d われわれが直接に関与する「こと」としての世界。

問六 傍線部6の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「もの」の世界を原子や分子からなる自然と理解し、それを公式に説明すること。
- b 具体的な「こと」の経験を、視点がない三次元空間の内部で把握すること。
- c 主観的な経験を「もの」と見なすことで、その説明に公共性をもたせること。
- d 「もの」の世界だけが真実の世界であり、自然の真相であると考えること。

問七 傍線部7の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「もの」の世界と「こと」の世界は、いずれもそのまま真実の世界である。
- b 科学的な世界の描写は、感覚的な「こと」の世界に重ね書きされている。
- c 事柄の真相は一つの世界であるが、それを説明する仕方は複数あり得る。
- d 「もの」の世界と「こと」の世界は、同一の仕方によって説明できる。